

学校長式辞

武蔵96期生にあたる高校入学者の皆さん、並びに同じく99期生にあたる中学校入学者の皆さん、ご入学おめでとうございます。武蔵高等学校中学校の生徒・教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。また、保護者の皆様におかれましても、ご息のご入学誠におめでとうございます。心より祝意を表します。

武蔵は日本で初めての7年制高等学校として1922年に創立いたしました。そして今から3年後の2022年には創立百周年を迎えます。創立者根津嘉一郎は実業家であり政治家でもありましたが、東武鉄道の創設など「鉄道王」として知られました。その嘉一郎が武蔵を創設したのは、1909年渋沢栄一を団長とする4か月に渡る渡米実業団に参加した際に、アメリカの資産家が慈善事業に多額の資金を投じる姿勢を目のあたりにし、「社会から得た利益は社会に還元せねばならない」という強い信念のもと、私財をなげうって、将来国家を支える育英、つまりエリートを育成しようと考えたからでありました。

以来、武蔵はこれまで、旧制高校時代を含め13000人以上の有為な人材を輩出してまいりました。学園長の有馬朗人先生は、日本を代表する物理学者であり、俳句の世界でも日本有数の俳人として知られます。東京大学総長、参議院議員、文部大臣も歴任されました。現在の東京大学の五神真総長、早稲田大学の田中愛治総長、さらには柴山昌彦文部科学大臣も武蔵の出身です。

そうした先輩たちは、みな10代をこの武蔵のキャンパスで過ごしてきたわけですが、武蔵では、創立以来の建学の精神として、「三理想」が長く受け継がれてきました。

すなわち「三理想」とは

- 一 東西文化融合のわが民族思想を遂行し得べき人物
 - 二 世界に雄飛するにたえる人物
 - 三 自ら調べ自ら考える力ある人物
- であります。

武蔵が創立された1922年と現代の時代状況は異なっており、この「三理想」は現代的な捉え直しをする必要があるとはいえ、グローバル化が進み、先行き不透明なこれからの時代を切り拓く人間を育成する上でも、極めて有効な指針となっていることに驚かされます。

さて、私自身のお話をします。私は武蔵高等学校中学校50期の卒業です。先ほど紹介した東大の五神総長は同級生です。この4月からご縁をいただき、長年武蔵の顔としてご活躍された梶取弘昌校長の後任として着任いたしました。

武蔵には高校卒業以来43年ぶりに戻ってきました。私もまた、49年前に皆さんと同じこの席に座り、期待と不安をもちながら中学校入学式に参加しました。そして、多感な10代の6年間をこの武蔵で過ごし、我々50期生はそれぞれの進路に散っていきました。そして今還暦を過ぎたことを機に、再び同期の仲間と集うことも多くなり、改めて自分の人生を振り返ってみると、自分の人生の基盤はまぎれもなく武蔵で形成されたことに気づくのです。

ただ、10代という時期は難しい。というのも、何者にもなれる可能性があるが、まだ何者でもない。この矛盾を抱えながら過ごす10代を、一体どのように過ごせばよいのか。そのことを真剣にそして本気で考えないと、皆さんの未来の人生はひょっとすると価値のない人生で終わってしまう可能性もある。世間では、たまに残念なニュースが流れます。高学歴であっても、愚かな犯罪をしてしまったり、自分本位な行動をとって社会に悪影響を及ぼしたりする人間がいます。

そこで、中学生はこれからの6年間、高校生はこれからの3年間、何者にもなれるがまだ何者でもないという、可能性と不安が入り混じったこの10代をどのように生きればよいのか。そしてたまたま武蔵にめぐり合わせた、たった一度しかない武蔵の10代をどのように過ごせばよいのか。そのことを考える上で、43年前に卒業した先輩という立場も踏まえ、三つの心がけを、陥りやすい失敗例も交えながら、新入生への歓迎の意を込めて、これからお話したいと思います。

まず一つ目ですが、「自分が恵まれているという自覚とそのことへの感謝の気持ちを持って」ということです。

皆さんは見事に受験を突破し、この武蔵に入学しました。それは皆さん自身の努力の成果だと思います。でも、本当に皆さんが頑張ったからなのでしょうか。皆さんが努力できる環境を用意してくれた保護者の皆さんのおかげではないのでしょうか。武蔵への入学金・授業料、塾へのお金、同時にお弁当作り、「つらい時も励ましてくれた応援」など様々なサポート、そうした物心両面の多大なる支援があったからではないのでしょうか。さらに、皆さんの保護者がそのようなサポートができるのも、そうした収入を与えてくれる社会のおかげではないのでしょうか。そしてそうした支援は、日本中の誰もが受けられるものではありません。皆さんは極めて恵まれた存在なのです。

「いや、僕の家は経済的にも苦しくて恵まれていないよ」という人もいるかもしれませんが。あるいは「恵まれすぎていることが逆に重荷なんだよ」とか「一見恵まれているように見えるけれど、ちっとも恵まれてはいないんだよ」と反発する人もいるかもしれませんが。でも、世界には今もなお戦火におびえて過ごしている地域があります。そうした世界で過ごす子供たちに思いをはせたとき、この日本で、この武蔵に入学できたということは、やはり恵まれている存在であると思わざるをえません。

自分は恵まれていると自覚することが、まず何よりも大切だと私は思います。そしてそのことに対して感謝の気持ちを持てるかです。もし、自分の心に手をあてて、感謝の念が持てない自分を発見したら。君はあぶない。その慢心やおごりが、将来思わぬ形で跳ねっかえってくる可能性があると思います。

そして大事なことは「自分が恵まれていると自覚したら、何をするのか」ということです。その恵まれたことによって得た力を、誰のために使うのか。自分のためなのか、社会のためなのか。そこで大きく分かれます。

イギリスの貴族階級に伝えられている精神に、フランス語の「ノブレス・オブリュージュ」という言葉があります。日本語に訳すと、高貴なる者の責務となります。つまり、上流階級に生まれたものは社会で果たさなければならない義務があるという考え方で、イギリスでは第一次世界大戦のときに、貴族の子弟が率先して戦地に赴き、命を落とした割合が高かったといわれています。

同じように、武蔵に入学できた皆さんが、そこで学んだ成果を自分の金儲けや出世のために生かそうと考えるのか、社会のために使おうとするのかは、その後の人生を決定的に変えていくと思います。自らが恵まれていることを自覚し、そのことに感謝し、そして社会のために何ができるかを本気で考える。今お話しした「ノブレス・オブリュージュ」の意味を、10代のうちに深く自らに問い、決意を固めることが第一の心がけです。

私は、武蔵生には、将来、様々な分野で「真に信頼され尊敬されるリーダー」になってほしいと願っています。したがって、そのためにもこの第一の心がけは、重要だと考えています。

二つ目は「人生をかけての志を持つ」ということです。

「君はたった一度の人生をかけて、何を成し遂げようとしていますか」と問いかけられて、君は答えられますか。もう一度言います。「君はたった一度の人生をかけて、何を成

し遂げようとしていますか」。その答えは、その時々で変わっていくかもしれません。また、なかなか見つからないかもしれません。でも10代のうちに、その都度その都度、その問いかけに向き合い、自分の人生をどうするのかという志を立てることが重要だと思います。

例えば、「将来医者になる」というのも素晴らしい志だと思いますが、その際、「どんな医者になりたいか」ということを考えることが、さらに重要だと思います。そこに人生をかけての価値が出てくると思います。お金を儲けてぜいたくができる医者になりたいとか、名声を得て人々からすごいと思わる医者になりたいという考え方もあるでしょうが、人々の心に寄り添う医者になりたいとか、人々に希望を与える医者になりたいという志もあるでしょう。そこに、それぞれの人の志の深さが出てきます。答えは簡単に出ない、あるいは時々で変わっていくものではありませんが、10代のうちから自分の志について考え続けることが大事だと思います。志を立てようとしないうちからは価値ある人生は生まれません。私は60年生きてきて、そして色々な人を見てきて、そう思います。

その上で、さらに私からの願いとして、武蔵生には「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」をもってもらいたいと思います。

それでは、「人類史に貢献せん」とはどういうことか。

今、人類史は大きな曲がり角に立っていると思います。例えば、政治の面では民主主義とポピュリズムの問題。経済面では自由と平等あるいは格差の問題、科学技術の面ではAIをはじめとするテクノロジーの進展と人間性の確保の問題。そして国際関係ではグローバル化の進展の一方で、民族・宗教間の対立も含め、緊迫する国際情勢の問題。ほかにも、人口問題、財政問題、原発処理も含めた環境・エネルギー問題など、いずれも人類が発展してきた一方で、それゆえに起きている課題との対立で悩まされています。つまり人類史は大きな曲がり角に立っています。

我々大人世代も、そうした歴史を積み重ねてきた当事者ですので、これらの課題にきちんと向き合うことが必要ですが、責任逃れになってしましますが、むしろこれらの課題の解決のためには、新しい柔軟な発想ができる、未来を担う皆さんに期待するしかないという面があります。

ぜひ、様々な分野で、武蔵生には、「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」を持ってほしい、そして先ほどもお話ししたように、「真に信頼され尊敬されるリーダー」になってほしいと私は願っています。

最後に、三つ目の心がけとして、それでは具体的にどうすればよいのかというお話をします。

それは、改めて「自ら調べ自ら考えよ」ということです。

自分で問題意識を持ち、自分で調べ、自分で考えることの積み重ねをどれだけできたかということが、人生を豊かにすることを決定づけると思います。言い換えれば、「自ら調べ自ら考える」という「自調自考」は、人生を生きるためのエンジンだと思います。そのエンジンを10代のうちに自分自身の中にしっかりと装着できるかということです。

「受け身の学び」とよく言います。特に中1の新生は、おそらく小学校時代、塾に通い、そこで与えられた効率的なカリキュラムを、ご家族のサポートも受けながら、一生懸命こなしてきたことと思います。努力できるという才能は素晴らしいと思いますが、一方で、そのことは、ともすると、他人から言われないと学ばないという落とし穴に入り込みます。

学びは決して、人から与えられたから学ぶというのではなく、自らの「好奇心」や「向上心」をもとに、わくわくしながら「学ぶもの」だと思います。

先ほど披露された武蔵讃歌は「武蔵大野の果てはあれ、学びの水はとこしえならめ」という歌詞で結ばれます。学びには終わりはない。それは学ぶことによるのみ、自らが成長し続けるとともに、社会の進歩にいささかなりとも貢献できるからだだと思います。

一方で、学びに関しても、本当に陥りやすい落とし穴があります。心をこめて二つアドバイスをします。

一つは「基礎基本を軽視するな」ということです。例えば古文なら文法、英語なら基礎単語や熟語、数学なら基本的な定理など、それぞれの分野には基礎基本があります。

武道や芸道では、よく「守破離」という言葉が言われます。お茶や武道が上達するには、まずは「守」、つまり型を守り型を覚えるという段階。次に「破」、つまり型を破り自分であれこれ考える段階、そして最後に「離」、つまり型から離れて自分なりの流儀・個性を発揮する段階。つまり、自分で考えろ、個性を発揮しろといっても、いきなりは無理であり、苦しいけれども基礎基本が型として守られるようになるまで、それを反復して身につける必要があるということです。したがって基礎基本をばかにしてはいけません。

二つ目のアドバイスですが、「知識」だけでなく「知恵」も身に付けろということです。知識というのは、机上の学問、つまり本を読んだり授業を聞いたりして頭の中に蓄えるものですが、「知恵」はいわば体験を通してはじめて体得される、生きた知識あるいは感覚ということができます。30代、40代になって社会で活躍する人は、必ずしも学校時代に単にテストの成績がよかった生徒ではなく、テストでは測りきれない、例えばコミュニケーション能力とか、リーダーシップとか、ユーモアとか、直観力とか、調整力とかを持った人物であることが多いと言われます。そのとおりだと思います。そしてそうした力、つまり「知恵」を身につけるためには、学校生活でいえば、学校での授業とともに、部活動や学校行事、さらに学校外の生活でいえば、海外留学などどんどん学校の外に飛び出して、自分とは生まれも育ちも違った環境の人たちと交流し、協働作業を行い、自分の未熟さを知るとともに、人から助けをもらう心地よさを体得するなど、自分の世界を大きく広げていくことです。

以上、新入生への歓迎の言葉として、一度しかない武蔵の10代をどのように生きれば良いのかという点について、大きく三つのことお話ししました。

一つ目は恵まれていることへの自覚と感謝、二つ目は志を持つことの大切さ、さらには「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」を持ってほしいという願い、そして三つ目は「自調自考」のエンジンを10代のうちに身に付けることの意味と、基礎基本を軽視するな、知恵を身に付けろという学びのアドバイスです。

冒頭、私は、50期生の60年を振り返って、その人生の基盤は武蔵で築かれるという話をしましたが、これはどこの環境でも同じですが、人生にとってのプラスの基盤を作るかマイナスの基盤を作るかは、それぞれの「気持ち一つ」だと思います。そうした意味から、最後に、これから武蔵の生活に飛び込んでいく皆さんに、私の好きなアメリカの詩人ウィルコックスの「人生の嵐」という詩を贈りたいと思います。

「吹いている風が全く同じでも、ある船は東へ行き、ある船は西へ行く。進路を決めるのは風ではない。帆の向きである。人生の航海でその行く先を決めるのは、なぎでもなければ、嵐でもない。魂の構えである。」

そのとおりだと思います。武蔵には少人数ならではの、人生に刺激を与えてくれる先生方との出会いや、これから一生を共にする仲間たちとの出会いがあります。ぜひ武蔵に吹いている素晴らしい風をしっかりとらえて、価値ある人生の基盤をつくってほしいと心から願っています。

最後に保護者の皆様方、改めてご息のご入学おめでとうございます。本日確かに、大切なお子様方をお預かりいたしました。教職員一同、責任をもってしっかりと取り組んでまいります。ただ、私の方から一つだけ、お願いがございます。先ほども申し上げましたように、10代というのは「何者にもなれるけれど、まだ何者でもない」という不安定な時期です。したがって、様々な試行錯誤をしながら生徒は成長していくと思います。大人から見ればヤキモキすることも多いと思いますが、そのとき、ぐっと我慢して、どうぞお子さんが、もがきあがきながらも成長していく様子を見守っていただければと存じます。ただし、もちろん、とりわけ中学生は未熟な存在だと思えます。時に手助けをすることも必要でしょう。ご心配なことなどありましたら、遠慮なく組主任にご連絡をいただき、共に協力しながらお子さんの成長をサポートしていきたいと考えています。このご縁を大切にしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

結びに、ここにいる新入生全員が、3年後、あるいは6年後に、「武蔵に入って本当に良かった」と心から思えることを願い、私の式辞とさせていただきます。